

操縦者養成

ス上など活用

民間の技能講習施設は県内で2カ所目。27日に、開校を祝う記念式典を米子市内で開いた。

学校法人米子自動車学校(米子市旗ヶ崎2丁目)が、小型無人機「ドローン」の操縦者を養成する事業を始めた。自動車学校教習所のコース上などを活用し、基本飛行と応用飛行を習得できる半日から2日間のメニューを設定する。(森安哲史)

米子自動車学校

ドローンは空撮や橋などの点検、農業散布、災害時の被害確認など活用が広がる。一方で全国的に事故やトラブルが相次ぎ、安全性



日、本会議で全市議16人が着用するのに合わせて実施。本庁舎で働く職員の中

ポロシャツを着た。ポロシャツの左胸には一反木綿の妖怪影絵と目の丸を手にした鬼太郎、背中にはリニエール完成を喜ぶねこ娘らの絵がデザインされ、窓口には普段と異なる雰囲気広がった。市総務課の渡辺文晴長(53)は「職員意識高揚も図れると思う。今後も積極的に着てリニエールをPRしたい」と話した。ロードは新装に伴い夜間

美術館転用など活用策話し合う

旧合銀根雨支店

昭和初期の洋風建築・旧山陰合同銀行根雨支店(白野町根雨)の活用検討委員会(座長・杉原幹雄地域未来社長、15人)の第2回会合が27日、白野町内であり、委員が美術館や歴史民俗資料の展示拠点など活用アイデアを出し合った。今後も協議を重ね、案を絞り込

例を挙げ、郷土作家の作品の流出や分散を防ぐためにも收藏、展示の拠点を設ける意義を強調。町民の作品を展示するギャラリー機能も持たせたいとした。歴史文化関係の委員らは旧根雨公会堂(同町根雨)を活用した町歴史民俗資料館にスタッフが常駐しておらず、資料が十分に生かされていない課題を指摘。旧合銀根雨支店を資料展示拠点に使い、旧根雨公会堂は



昭商工労働部 参事監(57) 写真上を充てるなどの人事異動を発表した。異動は30日付。

鳥取ハローワーク関連はこのほか、課長補佐級2人、係長級4人が異動。また、県営鳥取空港が7月1日から運営権を民間事業者の鳥取空港ビルに売却する「コンセッション方式」を導入するに合わせ、12人を出

所長に西村氏

県立鳥取ハローワーク

県はJ R鳥取駅構内に新設する県立鳥取ハローワークの所長(次長級)に西村

市民団体が提出した中国電力島根原発に関する陳情11件については、中電との間で立地自治体並みの事前了解の権限を持つ安全協定締結を求める内容など、6件を採択した。(園田太郎)

27議案可決し閉会

境港市議会

6月定例境港市議会は29日、総額7千万円の2018年度一般会計補正予算案など27議案を原案通り可決し閉会した。

補正予算案の主な歳出は、橋の改修や通学路のカラー舗装を行う防災・安全交付金事業2800万円▽同市渡町の市道を整備する中海護岸整備関連事業900万円―など。

でに判断する。(桝井映志)

第2部 転換期の加工現場 ④

水揚げ減少に伴う原料不足とコスト高に直面し、転換期に突入する境漁港の水産物加工基地。一角にある福栄(境港市昭和町)は、漁獲から加工・製造・販売までを一貫して行う6次産業という業態を武器に荒波を乗り越えている。「所有するあの4隻が自社加工原料を賄っている」。イカ漁専用の冷凍船やカニかご漁船の写真が飾られた本社で、食品部門を仕切る専務の岩田謙二(58)が切り出した。

1回の操業は1カ月、1カ月半の長工場。零下40度の船倉で急速冷凍し、保管庫が満杯になると帰港。取れたアカイカなど原料は境漁港へ陸送する。イカ漁船とカニかご漁船の2隻は境漁港が母港。日本海の漁場で取った生のスルメイカとベニズワイガニを水揚げし、供給する。「トータル管理できる自社一貫生産はトレーサビリティ(生産履歴)を容易



自社のイカ漁専用冷凍船で漁獲し、陸送された原料が加工される

6次産業化で荒波を突破

にさせ、原産地表示や食品の安全性に敏感な消費者やバイヤーに安心感を与えている」
安定的な原料確保
農林水産省の6次産業化法(2010年施行)を追い風に、水産業界でも生産者の所得向上を促す6次産業化の動きが広がる。同法は一方で産地の強化と十分に利用されていない国産魚の活用促進も狙う。具体的には新製品開発や販路開拓、施設整備などの取り組みを支援する。県内の水産関係で5年区切りの認定事業者更新可になったのは5者(13年11月現在)。漁徳水産、福栄、山陰旋網漁業協同組合、J F鳥取境港支所、弓ヶ浜水産で、いずれも境港市内に事業拠点を置く。6次産業事業者の最大の強みは安定的な原料確保にある。豊産物のように収穫量を見越した計画的な生産はできないが、水揚げや産地市場の魚価に大きく左右されるリスクは軽減。加工現場では自前で取った原料

漁業者が水産加工品の製造・販売・流通などを一体化させ、付加価値拡大を図る取り組み。境漁港では、地元産未利用魚を活用した新商品開発・販路拡大▽ギンザケ境港サーモンの高鮮度加工と全国販売▽巻き網漁獲物活用の商品化―などの取り組み例がある。

強み最大限生かす

1969年創業の福栄の歩みは初代のイカ釣り漁から始まる。その後、カニか

のストックもできるため、加工・製造ラインを効率的に回すことができる。水産加工流通課課長補佐の山田智子(38)は「生産・加工・流通を一体化させることで、付加価値の拡大につながる」とし、「6次化は生産者、加工・流通業者、大学研究者らが連携を深め、水産基地全体の浮揚を図る起爆剤にもなる」と話す。

に漁にも手を広げ、船舶工のメンテナンスをを行う鉄工部門を開設。元号が平成になり、2代目社長に就いた岩田慎介(61)は加工部門を新設。3年前には再生エネルギーの太陽光発電事業にも乗り出した。「決して背伸びしているわけなく、人との出会いの中で自然と事業が拡大していったという感じかな」。漁業部門を束ねる社長の岩田は言う。しかし、業界でいち早く6次産業を経営戦略の主柱に据え、業績を伸ばす福栄にとって、主力のイカ原料の記録的な水揚げ不振と、原料価格高騰は経営圧力になって重くのしかかる。どう荒波に挑むのか。岩田はこう言葉を結んだ。「魚種転換も考えはするが、イカをやめる気はない。安定的な事業継続は自社の強みを最大限に生かした製品の差別化、資源量に見合った新商品開発に懸かっていると思う」(敬称略)

(米子総局報道部・山根行雄)